



企画/大成建設株式会社

製作/桜映画社

16ミリ・カラー・24分

160,000円

響

ひびき

～ザ・シンフォニーホール～

■解説

日本には響きのよいホールが少いといわれてきた。響きは、それが演奏される建築空間と大きな関係を持っている。この映画は、日本ではじめてクラシック専用の理想的音楽空間として建設された大阪のザ・シンフォニーホールを紹介しながら、音と建築の関係を追求しようとしたものである。

西洋音楽は、日本の音楽に比べて残響を生かすことを大きな特徴として発達してきた。その歴史を振り返ることからはじめて、最新の音響技術を駆使しながら残響の本質を分析し、その響きを日本で再現する過程を描く。

■内容

多くの音楽家たちは、ホールも一つの楽器であるといっている。良い音のするホールでこそはじめて、作曲者、演奏者の意図は正しく聴衆につたえることができるのである。

ザ・シンフォニーホールの建設にあたり、より秀れたクラシック専用ホールをめざして様々な研究や実験が繰り返された。最初に、良いホールの最も大きな要素といえる“残響(ひびき)”とはどのようなものか調べてみる。無響室(音を少しも反射しない部屋)と残響室(よく音を反射する部屋)とでヴァイオリンを弾き比べ、その違いを明らかにし、また、水の波紋や、レーザー光線を使

って音の広がりや反射の仕方などを立体的にみてみた。

さらに、“響き”とクラシック音楽との関係も歴史的に見直してみる。中世教会音楽は長い残響時間を生かすように作られ、一方、宮廷音楽は、比較的短い残響時間が適していた。やがて、情緒的な表現のあふれるロマン派時代を迎え、より豊かな音を求めて、オーケストラのための専用ホールが作られるようになった。新しい音楽が、ホールの建築に影響を与え、また新しいホールが、作曲や演奏に影響を与えていった。次第にホールは、音楽のための一つの立体空間としてとらえられるようになっていったのである。

そして、昭和57年11月、ヨーロッパの名ホールの伝統と最新の音響技術を取り入れた“ザ・シンフォニーホール”が日本で完成した。

■協力

指揮	朝比奈 隆	ヴァイオリン	阿部富士男
演奏	大阪フィルハーモニー交響楽団	写真	木之下 晃

■スタッフ

製作	村山 英世	撮影	野崎 嘉彦
脚本/演出	土屋 信篤		上甲 巖
解説	伊藤 惣一	録音	菊地 進平

